

騒音あれこれ

評議員・京都大学大学院工学研究科教授 高橋 大次

好むと好まざるとにかかわらず音は私たちの耳に入ってくる。コミュニケーションとしての音、あるいは音を楽しむ場合には音に対して意識を集中させるが、聴きたくない音に意識を向けざるを得ない場合も多々ある。この段階で音は騒音となり、どんな種類のどんな些細な音でも騒音問題を引き起こす要因となる。このような考え方をすれば、騒音問題は人類誕生のときから始まっていたとも思われる。しかし、好まざる音は時代の変遷に伴って拡大していることも事実である。自分の愛車のエンジン音に聞惚れ、一種音楽のごとくに思う人もいないではないが、ほとんどの場合自動車から出る音は騒音となる。自動車騒音は都市化に伴う騒音拡大の典型とも考えられる。

騒音問題はその元となる要因（騒音源）が必ず存在し、その種類と量は都市化という環境変化に伴って変化してきた。あらためて身の回りを見たとき、新たな生活用品が新たな騒音源となるケースが多く存在する。例えば携帯電話。ところかまわず鳴る呼出音と受け答えの話し声。一昔前では考えられなかった騒音源が出現している。では、逆に過去に遡ったときはどうであろうか。例えば江戸時代、主に障子と襖が間仕切りとなる部屋のづくりでは高い遮音性はまったく期待できない。このことは当然経験的に分かっていたことであり、それを承知でその時代の人々はこのような環境を受け入れて暮らしていたことになる。壁に耳あり、障子に目あり、の世界では人目を憚ること、聞かれたらまずいことは「近う寄れ」と耳打ちすることで対応していた。そこにはプライバシー確保のために建物をどうしようという考えはまったく見られない。やはり日本独特のプライバシー意識・感覚があったのではなかろうかと思ってしまう。確かに、土と木と紙による日本の伝統建築では周りの音を遮断しようとするには限界がある。むしろこのような日本建築には、音もひっくるめて周囲の環境を丸ごと積極的に受け入れようとの方向性を強く感じる。やはりその背景には、このような時代、騒音源となるものが圧倒的に少ないことも大きな要因として考えられる。その後の時代の移り変わりは西欧的なプライバシーの考え方の影響と、それにもまして環境としての音が変化（騒音源となるものが増加の一途をたどる）してきたことによる影響を建築物が受けてきたことが大きいのではないだろうか。建物に関する音の問題を扱っている私のような者にとっては、建築物の遮音性能向上、すなわち、音は当然遮断されるものと考えているが、何となく違和感を覚える昨今でもある。

桂キャンパスへ移って一年半が経過した。新緑に風薫る今の季節、何気なく窓を開けると新鮮な空気とともに、何の音か特定できないようなゴーという音（おそらく京都市街全体が音源となった音）が飛び込んでくる。窓の開閉で始めて気付く音であり、環境を遮断することの意味をあらためて考えさせてくれる。